
研究

『ハーモニー』の描く近未来に関する一考察 —高度医療社会の身体と自己—

A Study of *Harmony*: On the Body and the Self in an Advanced Medical Society

キーワード：

恒常的健康監視システム, 身体, 自己, “切断”, サイエンス・フィクション研究

keyword：

homeostatic health-monitoring network, body, self, “disconnection”, science fiction studies

日本大学 根村直美
Nihon University Naomi NEMURA

要約

サイエンス・フィクションのあるものは、我々の社会に潜在する可能性を示唆していると考えられる。本稿では、ネットワーク化された高度医療社会がどのような身体や自己のあり方をうみだすことになるのかという観点から、伊藤計劃の『ハーモニー (2008)』の分析を試みた。

『ハーモニー』が描くのは、人々が、健康を維持する医療システムとつながら、そのシステムに服従することによって、「公共的身体」を形成していく社会であった。その社会においては、プライベートな身体であるためには、「リソース意識」に満ちた関係性の“切断”が求められた。『ハーモニー』では、人間が「完璧」になったとされる世界のビジョンも示される。それは、もはや“切断”の意志をもつ「わたし」は存在しておらず、プライベートな身体が立ち現れることがない世界であった。

『ハーモニー』は、逆説的に、身体をもち状況に埋め込まれている中で立ち現れる「わたし」という意識を浮き彫りにしている。その「わたし」は、状況への適応の結果としての断片の集まりにしかすぎず、確固とした存在ではない。しかし、「わたし」という意識をもつ存在においては、自己を維持するための方略としての“切断”の〈倫理〉がその意識の働きによって姿を現してくる。

原稿受付：2023年2月27日

掲載決定：2023年9月16日

近年Michel Foucaultが提示した「自己の技法」に注目するポストヒューマニストが現れているが、そうした論者の議論を参考にするならば、個々の構成員が柔軟に変容しつつ自己を維持するようなネットワーク社会の探究を「自己の技法」からはじめること、それが、伊藤が我々に残した大きな課題と考えることができるのではないだろうか。

Abstract

Some science fiction works have suggested the potential for our society by depicting a technocultural society in the future. Thus, this study analyzes *Harmony* from the viewpoint of what kind of body and self a networked society would create.

Harmony depicts a society in which people form a public body by connecting with and submitting to the medical network system that maintains their health. In that society, becoming a private body is required for breaking the relationship full of “resource awareness,” that is, “disconnection.” *Harmony* also envisions a world where human beings are said to be “completed.” In *Harmony*, human beings are guided to the world where the “I” that wills “disconnection” no longer exists, and a private body does not appear. In other words, it is a fixed and unchanging world where no new relationships are created.

Paradoxically, *Harmony* highlights the consciousness of “I” that emerges in an individual concrete situation where bodies are embedded. That “I” is only an assemblage of fragments that is the result of adaptation to the situation. It is not a firm existence. However, along with the consciousness of “I,” the ethics of “disconnection” appears as a strategy for maintaining oneself.

Recently, a posthumanist focuses on the concept of “technologies of the self,” which Michel Foucault presented. Also, the author, Project Itoh, suggests that we should start with the “technologies of the self” in order to explore a networked society in which individual members flexibly transform and maintain themselves.

1 はじめに

サイエンス・フィクションは、「シミュレーション」を行うことにより、存在論、倫理といった関連の問題とともに、人間と人間社会の科学的・テクノロジー的な改変の可能性について議論しようとする意識の1つの形式と考えることができる (Herbrechter, 2013: 116)。サイエンス・フィクションは「現実性と虚構性の間」を漂う「疑似的な空間」であるが、その空間は「虚構的であり異化された現在であるとともに、まだ知られていないものとしての未来空間」でもある (Herbrechter, 2013: 116)。すなわち、サイエンス・フィクションは、科学とテクノロジーを媒介として、これからの人間と人間社会を考えることをテーマとしているために、現在のテクノカルチャー的な状況の行方、言い換えれば、我々の社会のうちにすでに潜在しつつある可能性を明らかにすることに貢献しようと考えられるのである (Herbrechter, 2013: 116)。

サイエンス・フィクションは、Gilles Deleuze と Félix Guattari の議論に基づくとき (Deleuze and Guattari, 1991), 覆い隠されている世界の可能性を提示するという意味での〈芸術〉と位置づけることができる。また、作品が表象する世界を概念化するサイエンス・フィクション研究は、潜在する世界の可能性を明らかにするという意味での〈芸術〉を概念化する試みとしての〈哲学〉と捉えることのできるものである (Deleuze and Guattari, 1991)。

そして、そのような〈哲学〉の試みは、我々の生きる高度情報社会のうちに潜む可能性を概念化し、その社会に生きる我々が直面するであろう問題を明らかにすると考えられる。その試みは、高度情報社会に内在する問題を概念化することで、その問題を先鋭化して議論の蓄積を可能にするであろう。高度情報社会についての〈知〉の新たな地平を切り開くという意味で、サイエンス・フィクション研究は、社会情報学の重要な一分野とし

て位置づけることができるのである。

本稿は、そうしたサイエンス・フィクション研究の一環として、伊藤計劃の小説『ハーモニー (2008)』の分析を試みるものである。

第2節では、『ハーモニー』をサイエンス・フィクション全体の中で位置づけることにより、『ハーモニー』を分析することの意義を明らかにする。また、本稿が拠って立つ分析方法について説明し、本稿の分析の独自性を示す。

また、第3節のあらずじに続く、第4節からの『ハーモニー』の分析では、まずネットワーク化された社会がどのような〈身体〉のあり方をうみだすことになるのか、といった観点からの分析を行う。『ハーモニー』においては、各章の始まりと終わりに必ず〈body〉という文字列が配置されており、科学とテクノロジーがもたらす〈身体〉のあり方が『ハーモニー』のメインテーマの1つであると考えられるのである。

続く第5節においては、身体に関する分析を踏まえつつ、ネットワーク化された社会における人間の意識、とりわけ、〈自己〉のあり方についてどのような考えが示されているのかについても考察を行う。人間の意識、とりわけ、自己の問題は、伊藤が前作『虐殺器官 (2007)』において取り組んできたものであり、『ハーモニー』においても、メインテーマの1つと考えられるのである。

第6節では第4節・第5節の考察をまとめるとともに、第7節では伊藤が模索した「その先の言葉」について考察を試み、伊藤が我々に残した課題が何であったのかを探る。

なお、本稿においては、『ハーモニー』の造語と思われる用語、および、一般的な語であるが特別な意味が込められている用語は、鉤括弧(「」)で括って用いることとする。また、その語を最初に引用する場合は、2014年の文庫版『ハーモニー』(早川書房〈ハヤカワ文庫〉)を用い、その頁数のみを括弧内に示すこととする。ただし、全編にわたって使われている用語の場合には、初出

の頁数のみを記載することとする。

一方、『ハーモニー』をめぐる議論において、本稿筆者自身が強調したい語や特別な意味を込めたい語については、本節のように山括弧（〈 〉）、あるいは、ダブルクォーテーションマーク（“ ”）を用いて表記することとする。

また、『ハーモニー』以外でも、その語句等が他の論者からの引用の場合には、鉤括弧（「 」）を用い、一般の語句や元々は他の論者に由来する語句であっても特に強調したい場合や既存の概念と異なることを示唆したい場合には、山括弧（〈 〉）、あるいは、ダブルクォーテーションマーク（“ ”）を用いることとする。

2 『ハーモニー』の位置づけと分析の方法

本稿が『ハーモニー』を分析の対象とするのは、第一には、その作品が、ポストヒューマン状況にある近未来社会とその行方を描いた小説として世界的に評価をされてきたことによる。『ハーモニー』は、2009年に第30回日本SF大賞を受賞したにとどまらず、2010年にはフィリップ・ディック記念賞特別賞も受賞している。

ここで言う「ポストヒューマン状況」というのは、テクノロジー、とりわけ、情報テクノロジーと多面的に結びついており、有機体と有機体が組み込まれている情報の循環の間が分かちがたい状態にあることを意味している（Hayles, 1999: 35）。

『ハーモニー』は、情報テクノロジーと人間が密接的に接続された状況を描いている点において、サイバーパンクとの関連性が高いが、そのものと言えるかは議論の余地がある（藤田, 2015: 69）。むしろ、『ハーモニー』は、ゼロ年代以降、主に米国を中心として流行したディストピア小説、言い換えれば、ポスト・アポカリプスものの1つと捉えることができる（小財, 2015: 34）。ポスト・アポカリプスは、「終末は到来したにもかかわらず黙示録的な

テキストが終わらない状態」であり、「死の瞬間ではなく、その『果てしない持続』を特徴とする」と定義されているが、『ハーモニー』の結末は、ポスト・アポカリプスの定義そのものと見ることができるのである（小財, 2015: 35）。

また、第二には、『ハーモニー』が、「〈大災禍〉（ザ・マイルストロム）」（p.21）という、世界規模の暴動と戦争、そして、それらに起因する病気の蔓延に対する〈反動〉としてうみだされた高度医療社会を想定していることによる。『ハーモニー』は混乱の後に現れた高度な医療システムに個人情報を提供することで、健康や安全が保障される社会を描く。

『ハーモニー』は、長引くコロナ禍においてあらためて評価を高めたが（野坂, 2022）、個人の医療情報を集約する医療システムが構想されているポストコロナの現在、『ハーモニー』が描く混乱の後に現れた高度医療社会は、より一層リアリティを増していると言えよう。ポストヒューマン状況、あるいは、ポストヒューマンを描くサイエンス・フィクションは多くあるが、『ハーモニー』を取り上げるのは、それが我々の喫緊の課題を先鋭化して描きだしていると考えられるからである。世界規模の混乱はまさに我々が経験したものである。そして、そうした混乱の後に現れるかもしれない社会についてもまた、顕在化しつつある我々の世界の可能性と考えるを得ないのである。

さて、本稿が『ハーモニー』の分析に際して用いるのは、Ingrid RichardsonとCarly Harper、あるいは、Jon DoveyとHelen W. Kennedyが、Maurice Merleau-Pontyの議論を基に展開した、経験を分析するための現象学的方法である（Richardson and Harper, 2002; Dovey and Kennedy, 2006）。その方法においては、「身体図式（body schema）」、あるいは、「身体イメージ」という概念は、我々に、「科学」や「常識」という先入観をわきに置き、「生きられている経験」についての意識を省察することを求める。そして、その方法では、「自己」は本質を直観する意識ではなく、身体化された経験を意識する「身

体自己 (body-subject)」である。

こうした「科学」や「常識」に囚われない現象学の方法は、身体や自己の「虚構的な (fictional)、あるいは、象徴的な (symbolic)」マッピングも射程に入りうることを意味する (Richardson and Harper, 2002)。本稿では、その方法をサイエンス・フィクション研究に有効なものと位置づけ、『ハーモニー』の登場人物、とりわけ、主人公の経験を現象学的方法に拠って立って分析し、科学とテクノロジーのもたらす〈身体〉のあり方、そして、〈自己〉のあり方がどのようなものであるのかを読み解くことを試みることにする。

先にも述べたように、これまで『ハーモニー』は、主として、ディストピア小説、正確には、ユートピアになると思っていたら、あまりにもひどい世界になってしまったケース (藤田, 2015: 69) の系譜の中で読まれ論じられてきた (小財, 2015; 藤田, 2015; 円堂, 2019, 15-62; 野波, 2023)。また、ケルト神話との関連に目を向け、『ハーモニー』をヒューマンイズムの浸透と拡散の果てにたどり着いた神話的世界とする議論もなされてきている (岡和田, 2013)。

そうした論考においても、『ハーモニー』が想定するポストヒューマン的な近未来社会や人間のあり方がどのようなものかを読み解くことは試みられている。しかしながら、その近未来会とポストヒューマンのあり様を現象学的方法に拠って立ち、登場人物の〈身体〉と〈自己〉の経験から読み解いていく試みはこれまで行われてはこなかった。本稿の試みは、『ハーモニー』が描く「ユートピア=ディストピア」(円堂, 2019: 43) 的な状況に、より多面的・多角的に光を当てることになると考えられるのである。

そもそも『ハーモニー』は、伊藤の夭折もあり、作品の評価に比してその研究の蓄積はそれほど進んでいない。個人の医療情報を集約する医療システムの構築に向かっているポストコロナの今だからこそ、『ハーモニー』の研究のより一層の蓄積

が求められるであろう。

3 あらすじ

アメリカで発生した暴動をきっかけに世界を混乱のつばに叩き込んだ「〈大災禍〉」後、「生府」(p.14)、すなわち、医療合意共同体が統治する高度医療社会が成立した。人々は、健康と優しさを尊ぶ「生命主義」(p.40) の名の下に、「生府」により管理されることになった。人々は、WatchMe (体内監視システム) を体に埋め込み、あらゆるリスクから遠ざけられることになったのである。

主人公・霧慧トアンは「生府」の番人である「世界保健機構 (WHO)」(p.40) の螺旋監察官であった。紛争地域の停戦監視などが仕事だ。だが、トアンは「生命主義」への違和感をぬぐうことができず、WatchMeの裏をかいて、禁止された酒や煙草を嗜んでいた。トアンには少女のとき、御冷ミアハという友人がいた。成績優秀でありながら、「生府」の管理を憎悪する少女であった。トアンと零下堂キアンはミアハの導くままに自死を試みた。そして、ミアハだけが死に、トアンとキアンは取り残された。

それから13年。トアンは螺旋監察官となり、キアンは普通の市民として生きてきた。謹慎処分 で日本に帰国することになったトアンは、キアンと再会し、食事をした。その目の前でキアンは自らの首へとナイフを突き立てた。この日、世界で同時多発自殺事件が発生したのである。どうして、キアン、あるいは、人々は死を選んだのか。キアンの死の真相を探るうちに、トアンは、その背後にミアハの影を感じた。

その同時多発自殺事件の後、ネットワーク24という報道機関に送られた『宣言』(p.187)、すなわち、誰かの命を奪うことを命じ、それができない者は自身の命が奪われることを宣言する何者かのメッセージが放送され、世界は混乱に陥った。

その混乱の中、トアンは、ミアハを追ってバク

ダッドからチェチェンへと向かい、そこでミアハと対峙することになった。そして、人類を「生命主義」に基づく健康社会と完全に調和させる「ハーモニー・プログラム」(p.260)を、「〈次世代ヒト行動特性記述ワーキンググループ〉」(p.196)の老人たちに実行させるために、ミアハが世界を混乱に陥れようとしたことが明らかになるのだった。

4 『ハーモニー』における身体

伊藤は、『虐殺器官』においては、虐殺を引き起こすものとしての、言語の違いによらない普遍的な「深層の文法」(伊藤, 2014: 216)に焦点を当てており、言語や言葉を通じて人間の行動が支配される様を描いている。それに対して、『ハーモニー』では、身体を通じた統治が焦点化されている。本節ではまず、『ハーモニー』に描かれた身体の諸相をめぐって考察を進める。

4.1 公共物としての身体

『ハーモニー』の主人公が生きるのは、健康の保全を統治機構の最大の責務と見なす「生命主義」に基づく社会である。それは、「成人に対する十分にネットワークされた恒常的健康監視システムへの組みこみ」「安価な薬剤および医療処置の『大量医療消費』システム」「将来予想される生活習慣病を未然に防ぐ栄養摂取及び生活パターンに関する助言の提供」(p.58)を基本のライフスタイルとする社会である。『ハーモニー』が描く社会は、恒常的健康監視システムへの接続によって、『標準化された』人体」(p.324)を維持し続けようとする高度医療社会であるが、それは、「生まれてから百数歳ぐらいで死ぬまで、何の病気にもならず、イヤなものは一切見ることなく過ごしていける」(p.194)社会である。言い換えれば、その世界は、「固定した時間」(p.194)と「変化のない空間」(p.194)と表現されるような平穏さに覆い尽くされた世界である。

『ハーモニー』が描く社会では、「生府」の統治のもとに生きる人間、すなわち、「生府」の「合意員」(p.88)は、自らの身体を「公共的身体」(p.23)と位置づける。「公共的身体」とは、自分ひとりのものではなく、社会にとっての公共財であるような身体のことである。「生府」社会では、体内にインストールされたWatchMeが身体で起こっていることを監視し、メディケア(個人用医療薬精製システム)が各種の病気に対抗するのに必要な物質を造り出すのであるが、それと同時に、人々の行動をも規制する。WatchMeは、公共の場で興奮するなどの「精神的逸脱」(p.143)への警告も行うのである。

そして、その社会では、「不摂生」(p.82)は許されない。人々は、身体への規制を「規範としてごく自然に受け入れる」(p.143)。「公共的身体」という感覚は、言い換えれば「リソース意識」(p.23)である。それは、自身の身体を、常に社会にとって欠くべからざる財産と捉える意識にほかならない。身体への規制は、「リソース意識」に支えられている。「不摂生」は「公共的身体」への攻撃であり「リソース意識」を欠いた恥ずべき行為とする意識が人々のうちに深くしみ込み、「公共的身体」を産出していく。人々を律するのは人々の中に根を張っている。人々は「目に見えずどこにも存在しない規範に従う」(p.258)。皆が自分で身体を律することで、公共化された身体がうみだされていくのである。

『ハーモニー』が描くのは、医療システムにつながれそのシステムに服従することによって、同じような標準体型で人々が生きる社会であり、「医学的に均質化された」(p.93)社会である。その社会の「均質化された」身体は、「完璧な人間」(p.171)に向かっている身体である。後にも述べるように、その身体は個人が社会と完全に一致し、「一個の全体」(p.362)となることによって完成されることになるのである。

4.2 プライベートな身体

ところで、『ハーモニー』では、「公共的身体」ではない〈プライベートな身体〉も描かれている。それは、「社会のものでも規範のものでもない、自分だけの身体」(p.305)である。

WatchMeが組み込まれる前のトアンの身体は〈プライベートな身体〉であったと見ることができる。それは、身体を公共化するシステムにつながれていないことで可能となっている身体であったが、同時に、ミアハとキアンとの関わりを通じて、個別具体的な状況において立ち現れる身体であった。その身体は、ミアハとキアンとのごく個人的関係を通じて顕在化されるものであり、「真綿で首を絞める」(p.18)のような優しさに満ちた「生命主義」社会の「空気」(p.203)への「憎悪」(p.18)を通じて構築されるものであった。

そうしたごく個人的関係性において、その3人の少女は、大人になる前に自死を試みる。その試みは失敗に終わるが、身体を公共化するネットワークへの接続を拒否するためには、「権力の限界」(p.291)、すなわち、死を選ばなくてはならないことが示される。また、その試みの失敗とともに、3人の時間は失われることになる。身体を公共化するネットワーク社会においては、〈プライベートな身体〉を維持し続けるための3人の関係性がもはや望めないことも示されるのである。

さて、大人になりWatchMeをインストールしたトアンは、「世界保健機構(WHO)」の上級螺旋監察官となる。そして、それぞれの土地の「生府」が住民に「『健康で人間的な』生活を保障しているかどうか」(p.57)を査察するためにサハラに赴任することになる。トアンは「生命主義」の尖兵たる立場にあるが、偽の体内情報をサーバに送信するDummyMeを身体にインストールして監視システムを欺き、酒やタバコなどの「自傷性物質」(p.74)を愉しんでいた。

WatchMeを欺き「自傷性物質」を愉しむトアンにとって、サハラの地とその地の状況は、監視シス

テムからの「逃げ場所」(p.57)であった。その地には、「生命主義」を「帝国主義」(p.40)と位置づけるケル・タマシユクの民がおり、トアンは、そのケル・タマシユクから酒やタバコを手に入れる。ケル・タマシユクの民はWatchMeをインストールしているが、その「医療サーバはどこが生府のネットともリンクしていない」(p.53)。身体を公共化するネットワークに接続されていない民との関わりにおいて〈プライベートな身体〉が意識され経験されていたがゆえに、そこはトアンにとって「逃げ場所」であったと見ることができるであろう。

そして、そうした〈プライベートな身体〉がトアンにおいて最も強く意識され経験されたのは、ミアハの影を追いかける行程においてであり、ミアハとの再会、そして、対決においてであった。

キアンを含む同時多発自殺事件、それに続く「宣言」後の混乱の中、ミアハを追いチェチェンへと向かうトアンは、この事件が自身にとってごく個人的な事件であることを確認していく。ミアハを追い続けるトアンに対して、いつも嫌味を言い合っていた上司が「もしかしたら、世界はあなたの肩にかかっているのかもしれない。がんばって」(p.306)という「激励」(p.306)の言葉を投げかけた。しかしその時、トアンは「これはそもそもの始まりから個人的事件だったし、その展開もどんどん個人的な狭路にはまっていった」(p.306)と考えるのである。トアンは、世界中で暴動や集団自殺が続いているその時にあっても、世界のことを気にかけてはいなかった。トアンにとっては、キアン、そして、父親である霧慧ヌアザを殺したかもしれないミアハに会い、何らかの「結末を得ること」(p.306)が行動の根拠であり、実感であった。

ごく個人的な事件であることを確認していくトアンにおいては、「リソース意識」が入り込む余地がなくなり、個別具体的な状況で立ち現れる〈プライベートな身体〉へと向かっていく。ごく個人的な事情の中でミアハを追うトアンは、チェチェンで螺旋監察官ウーヴェ・ヴォールの協力を得る

ことになるのだが、そのウーヴェは、WatchMeを騙して酒やタバコを嗜む。そして、「この優しさと健康でぎゅう詰めの社会から手前勝手に逃げ出したくて人生をふらふらあっちへこっちへ彷徨った結果（中略）国際社会の責任を一身に背負う」（p.313）ことになったと語る人物であった。そのウーヴェと関わり、共にWatchMeを欺くことで、トアンは、〈プライベートな身体〉を意識し経験しはじめていくのである。

トアンは、山地のバンカーにおいてついにミアハと再会するが、そこは「医療サーバとはオフライン」（p.323）の地であった。そこで、トアンは、ミアハがステップを踏む姿を見る。『ハーモニー』の描く世界において、はじめて描かれるダンスであり、「タタタッ」「タタン」（p.337）などの擬音によって描かれるステップは、ミアハがやろうとしたことをトアンに語る間続く。このステップの音があることにより、ミアハがやろうとしたことが語られるこの場面は、トアンとミアハのごく個人的な関係性において立ち現れる〈プライベートな身体〉を感じさせるものとなっている。すなわち、その身体は、医療サーバからは完全にオフラインとなった状態においてはじめて可能となるものであり、2人のごく個人的な関係を通じて個別具体的な状況において立ち現れる身体にほかならなかった。

4.3 〈プライベートな身体〉への意志

先に見たように、『ハーモニー』が描く社会では、「生府」が〈より良い生〉を「合意員」に保障しようとしてその力をふるい、「合意員」は従順な身体を産出していく。『ハーモニー』で描かれた「生府」の統治は、〈より良き生〉を実現しようとする権力であり、Michel Foucaultの言う「生に対する権力」、あるいは、「生-権力」（Foucault, 1994）として理解できるものである⁽¹⁾。伊藤は、ミアハに、「権力が掌握しているのは、いまや生きることそのもの」（p.291）と語らせている。さらに、「死つ

ていうのはその権力の限界で、そんな権力から逃れることができる瞬間。死は存在のもっとも秘密の点。もっともプライベートな点」（p.291）というセリフを言わせているのであるが、そのセリフが、生-権力論において、Foucaultが「死は権力の限界であり、権力の手には捉えられぬ時点である。死は存在の最も秘密な点、最も『私的な』点である」（Foucault, 1994: 182）⁽²⁾と論じたのを受けていることは明らかであろう。

その〈生に対する権力〉から逃れた〈プライベートな身体〉は、トアンにとって、ミアハとキアンとの関わりの中で意識されるものであった。伊藤は、インタビューにおいて、トアンとミアハ、そして、キアンの関係を「社会」と呼んでいる（伊藤, 2014; 372）。『ハーモニー』においては、〈プライベートな身体〉状況にあることは「自らの身体が、そのまま自らの身体である世界」（p.305）と表現され、その身体については、「わたしのもの」（p.33）と言い表される。しかしながら、その身体は、実は〈社会的な存在〉であることに拠って立つものであった。

ただし、それは、あくまで、キアンと2人でいることが「ミアハの欠落を実感させる」（p.87）ような社会であり、個別具体的な個人々が「此処に在る」（p.346）ような社会と考えられる。その社会は、「一個の全体」ではないのである。

その一方、トアンは、その少女時代の社会におけるミアハと自分の関係を「同志」（p.99）、あるいは、「ドッベルゲンガー」（p.95）と表現している。トアンにとって、ミアハは、自己ではないが、相互作用を通じて自己を形づくるような存在であったと言えよう。

ところで、先にも述べたように、〈プライベートな身体〉は、「公共的身体」を形づくるネットワークから〈切り離されること〉、したがって、そのネットワークにつながれて同じような体型をもち、「互いのことを気遣」（p.21）い合い、「ハーモニーを奏でる」（p.21）ような人々から〈切り

離されること)、いわば、“切断”によってはじめて可能になる身体である。

ここで思い起こされるのは、“切断”という概念をポストヒューマン状況において生起しつつある〈倫理〉として展開したポストヒューマン主義の論者David Rodenの議論 (Roden, 2015: 186-193) である⁽³⁾。Rodenが言う〈倫理〉とは、ポストヒューマン状況において生じつつある、〈自己を維持するための方略〉を記述的に示したものである。こうした記述は、必ずしも我々がしたがうべき倫理を基礎づけるわけではないであろう。しかしながら、既存の秩序を超えて顕在化しつつある世界のあり方を概念化するのが哲学であり (Deleuze and Guattari, 1991)、その中でも人間社会の新たな経験のあり方を概念化するのが倫理学と考える立場からするならば、そのような〈倫理〉を、ポストヒューマン状況を倫理的に分析するのに有効なツールとして用いることは可能であろう。

さて、Rodenはまず、主体を、〈表象をもつかまたないかに拘わらず、機能的な自律性をもつ集合体〉と捉える考え方を示した。そのうえで、そうした主体が自己を維持するためにとっての方略が“切断”であるとした。“切断”とは、主体、つまり、機能的な自律性をもつ集合体間の関係であり、主体間の出会いによってうみだされる特異なイベントである。それは、世界との新たな結合を成し遂げる能力であり、その主体の柔軟性と力を表すものなのである。

前述のように、『ハーモニー』では、トアンは、ミアハに誘われ、キアンとともに、健康を監視し維持する医療システムと「公共物としての身体」(p.45) という意識からなる「生府」社会のうちに組み込まれることを拒んで自死を試みる。ミアハ、そして、トアンにとっては、死は「生府」の「生-権力」から逃れる瞬間であり、プライベートな点である。言い換えれば、「リソース意識」に基づき〈ハーモニー〉が奏でられる社会は、健康を監視するネットワークとそのネットワークに

服従する人々からの“切断”がない社会であり、「わたしのもの」である身体を維持するための方略をもちえず、もはや「わたし」そのものが維持しえない社会と捉えられていたがゆえに、彼女らは自死を選んだと見ることができるのである。

また、『ハーモニー』では、そのような自死がなくなった世界は、人間が「完璧」(p.171) となり、その結果、個人が社会と完全に一致し「社会のもの」(p.171) となった世界として描かれる。その世界は、人間の「意識が消滅」(p.262) した世界であり、後にも触れるように、意識をもつ人間にとってはある意味での「死」(p.266) と引き換えに実現される世界である。

『ハーモニー』の後半では、意識、とりわけ〈わたし〉という意識の問題が重要なテーマとなっていく。〈わたし〉という意識をもつ存在においては、“切断”をうむのは、その意識が紡ぎだす「自由意志」(p.256) だからである。かくして、『虐殺器官』以来の伊藤の重大な関心事であった〈わたし〉という意識の問題が再び前景化してくることになる。

5 『ハーモニー』における意識

本節では、『ハーモニー』の後半において前景化してくる、意識、とりわけ、〈わたし〉という意識の問題をめぐって考察を進めていく。

5.1 人間の意志

『ハーモニー』では、トアンがミアハを迫る行程において、“切断”をうむ人間の意志について語られていく。

その口火を切るのが、父親ヌァザの友人でありかつては共同研究者でもあった冴紀ケイタのもとを訪れた際に交わされた会話である。冴紀によれば、人間は、「多種多様な『欲求』のモジュールが、競って選択されようと調整を行うことで最終的に下す判断」(p.169) を「意志」(p.169) と呼んでいる。つまり、「人間の意志」(p.170) という

のは、「タマシイ」(p.170)といった「常識的に思いがちなひとつの統合された存在」「これだと決断を下すなにかひとつの塊」(p.170)などではなく、「侃々諤々の論争を繰り広げている全体」(p.170)という考えが示されるのである。冴紀はさらに、「バラバラな断片の集まり」(p.170)であることを「忘却」(p.170)して「わたし」(p.170)という「あたかもひとつの個体であるかのように言い張っている」(p.170)のが人間だとも言う。

そして、トアンの父親ヌァザは、それぞれが自分のもとめるものを主張する欲求に対して与えられる報酬系の諸要素をいじることによって人間の意志を制御することが可能と考え、そのための医療分子の研究を行っていたことが明らかにされる。すなわち、「ある欲求に対して与えられる脳内の報酬が低くなれば」(p.171)、その欲求のエージェントが『『脳内会議』でイニシアティブをとることが難しくな」(p.171)り、「人間の決断も自ずと変わってくる」(p.171)というわけである。「人間の意志」の制御とは、人間のバラバラな欠片でできた魂をかきあつめて、パズルのようにくっつけることによって「完璧な人間」(p.171)を作ろうという試みにほかならないのである。

5.2 意識の消滅

さて、トアンは、冴紀との面会后、「人間の意志」を制御する医療分子技術を研究するヌァザに会うためにバグダッドに向かう。そこで、「人間の意志」の制御がどのような結果をもたらすのかが語られることになる。

ヌァザは、調和のとれた意志を人間の脳に設定することを目的とする技術とシステム「ハーモニー・プログラム」の重大な副作用を明らかにした。それは、「意識の消滅」(p.262)であった。「意識とはまさに、脳の無意識下に存在する多数のエージェントの利害を調整するためにあるのであって、いわば意識されざる葛藤の結果が我々の意識であり、行動であるのだ」(p.264)。そして、

「調和のとれた意志とは、すべてが当然であるような行動の状態であり、行為の決断に際して要請される意志そのものが存在しない状態」(p.264)である。それゆえ、意識は不要になり消滅してしまったというのである。この結果を受け、人間の意志を制御する医療分子群のネットワークは、人間の脳に実装するものの、発現はしないでおくという判断が下されたことが明らかにされる。

それと同時に、意志が制御されることによってもたらされる「意識の消滅」は「わたし」の消滅でもあり、それは、自分が自分であるという意識をもつ存在にとっては「死に等しい」(p.266)という見方が示される。ヌァザをはじめとする「次世代ヒト行動特性記述ワーキンググループ」の主流は、「意識の停止」(p.344)を「死」と同義と捉え、意志の制御を行うことを控える判断をしていたのである。

そして、「意識の消滅」を「死」と同義とすることと表裏一体であるが、『『わたしはわたしである』という鏡写しの意識』(p.345)こそが「人間の尊厳だ」(p.345)とする感覚や多くの人間が『『わたしがわたしである』という脳の機能を失いたくない』(p.268)と思っているであろうことが語られるのである。

5.3 “切断”なき世界

『ハーモニー』では、「すべての生き物は膨大なその場しのぎの集合体」(p.325)であり、それゆえ、倫理や神聖さといったものは、「すべて状況への適応として脳が獲得したに過ぎない継ぎ接ぎの一部」(p.325)と捉えられている。その考えによれば、『『わたしがわたしである』という思い込み』(p.326)は、ある環境で生きるために必要であったがため、つまり、「生存に寄与したから存在しているだけ」(p.325)である。

『ハーモニー』においては、ミアハとその考えに与する「次世代ヒト行動特性記述ワーキンググループ」のメンバーは、その場その場での「寄せ

集め」(p.343)であるという認識から、意識は必要ないという判断に至る。「生府」が高度医療社会を作り上げた段階においては、意識という機能を必要とする環境はすでに過ぎ去っているのであり、「人間は、進んで自らの組み上げたシステムに従って、対立や逡巡、苦悩を生む厄介な機能としての意識を除去してしまうべきなのではないか」(p.327)と考えたのである。

先に取り上げたRodenも、集合体の概念を用いて、『ハーモニー』で示されたのと同様の「寄せ集め」としての人間というイメージを提示している(Roden, 2014: 124-149, 189-193)⁽³⁾。しかしながら、ミアハが実現しようとした世界には、もはや“切断”の意志をもつ「わたし」は存在してはいない。人間が「完璧」になったとされる世界は、“切断”が完全に絶たれた世界である。そうした“切断”なき世界は、「もっともプライベートな点」が消失する世界であり、そこでは、〈プライベートな身体〉が立ち現れることもなくなる。言い換えれば、それは、「寄せ集め」の欠片が新たな関係を形づくることなく、動きが取れないように組み合わせられた状態である。『ハーモニー』は、Rodenがポストヒューマン状況の〈倫理〉のキー概念として提示する“切断”が不可能な状況がどのような世界なのかを、意識をもつ人間の立場から描いたものと考えることができるであろう。

6 『ハーモニー』の問いかけるもの

最初に述べたように、『ハーモニー』のメインテーマ、少なくとも、その1つは、ネットワーク化された社会の〈身体〉のあり方がどのようなものとなるのかを描き出すことであったと言ってよい。

ところで、かつて本稿筆者が分析した『イノセンス』もまた、監督の押井守がそれを「身体論」と位置づけており、『ハーモニー』と『イノセンス』は通底するテーマをもっていると言えるであろう(根村, 2017)。

2004年当時の伊藤は、押井監督の『イノセンス』で描かれた〈身体〉、すなわち、「持って生まれた肉体のことではなくて、自分がものを考え、社会化されていく中で獲得した第2の肉体」(立花×押井, 2006)という〈身体図式・身体イメージ〉に対して批判的なコメントをしている(伊藤, 2015)。しかしながら、筆者は、その身体は個別具体的な状況において立ち現れる〈物質的な身体〉であり、それはまさに、伊藤が『ハーモニー』において追い求めた身体であったと考えている。

その『イノセンス』は、電脳化されたネットワーク社会において、〈自己ではないが自己を形づくる他者〉との相互作用を通じて立ち現れる身体と自己を捉えようとしたものと見ることができる。すなわち、個別具体的な身体とともに主体が現れ、また、主体とともに個別具体的な身体が現れると捉えられている。しかも、『イノセンス』では、それぞれの場面を織りなす主体の「ゴースト(意識、とりわけ、『わたし』という意識)」も、そうした〈他者〉との相互作用の中で構築される身体を通じて現れる。『イノセンス』においては、身体と主体のうちの「ゴースト」も一体的に捉えられているのである。

それでは、『ハーモニー』はどうか。『ハーモニー』が描くのは、脳ではなく、むしろ、脳以外の身体がつながれネットワーク化された世界である。そのネットワークは、『標準化』された人体の維持のために機能する。そして、人々は、『標準化された』人体を社会常識化し、その規範に自らを縛りつける。それゆえ、個別具体的な状況における身体は、そのネットワークにつながれることなく、「標準」という社会常識に縛りつけられた人々との関係性を離れたプライベートな関係によりはじめて可能となるものとして描かれる。その一方で、「公共的身体」は、「魂」、すなわち、「此処に在る」という意識の「尊厳」の消失によって完成されており、〈プライベートな身体〉と主体のうちのそうした意識の現れとの深い関わりが

示唆されている。『ハーモニー』においても、個別具体的な身体と主体のうちの「魂」と呼びうるような意識が不可分なものとして捉えられていると言えよう。

『ハーモニー』においては、「公共的身体」が完成し、「医療産業社会との完全なハーモニーをみた人類」(p.362)の状態は、人類が「完全な何か」(p.363)に触れている状態とも言われる。伊藤は、インタビューにおいて、その状態を「ある種のハッピーエンド」(伊藤, 2014: 373)と述べたが、Mark O'Connellが取材したような「トランスヒューマニズム」の立場に立てば、確かにそう見ることも可能であろう。

O'Connellによれば、「トランスヒューマニズム」とは「われわれは技術を用いて人類の未来の進化を制御することができるしそうすべきだという確信に依拠する運動」(O'Connell, 2018: 2)⁽⁴⁾である。さて、『ハーモニー』の描く世界では、身体が恒常的健康監視システムによって管理され、生まれてから「百歳ぐらいで死ぬまで、何の病気にもならず」過ごすことが出来る。O'Connellが取り上げるような、テクノロジーを通じた心身の増強を志向し徹底的な生命延長をよしと考えるトランスヒューマニストたち(O'Connell, 2018)にとっては、そうした高度医療システムが実現した社会は理想に近づいた社会なのかもしれない。

また、『ハーモニー』においては、そうした社会は「わたし」という意識の消失によって実現されているが、O'Connellによれば、Tim Cannonは、徹底的な自己改造を追求する中で、「自己の概念をすっかり消し去る」ことを考えるに至っている(O'Connell, 2018: 141)⁽⁵⁾。『ハーモニー』の世界はそうしたトランスヒューマニストの考えと呼応していると言えるかもしれない。

伊藤は、『ハーモニー』を通じて、生命や健康の保障という名のもと身体がネットワーク化されていく社会を近未来として提示した。そして、病気をせず長く生きる身体を実現するためには、人

類は「一個の全体」としての存在になる必要があり、「わたし」という意識を消滅させることがその存在になることであるというビジョンを示したと言える。伊藤は、初期のサイバーカルチャー作家たちとは反対に、ネットワーク社会の究極の姿を、「身体からの逃避」(Brians, 2011)としてではなく、むしろ〈精神からの逃避〉として描きだしたのである。

7 「その先の言葉」に向けて

しかしながら、伊藤は、『ハーモニー』の結末について、「はたして本当にそれでよかったのか」という思いがあり、その意味ではハッピーエンドとは言えないと述べている(伊藤, 2014: 373-374)。すなわち、決して上述のような「トランスヒューマニズム」の立場に身を置いているわけではない。伊藤は、インタビューにおいて、「その他に言葉が見つからなかった」、すなわち、「その先の言葉」を探したが見つかることができなかったと述べているのである(伊藤, 2014: 373)。

伊藤は、「わたし」という意識の消失を語って『ハーモニー』を終えざるをえなかったが、『ハーモニー』においては、意識をもつ人間が「わたしはわたしである」ことに対して抱くこだわり、作品内の言葉でいえば、「尊厳」の感覚が、身体とともに『ハーモニー』のもう1つのテーマであることは確かである。一旦「わたしはわたしである」という意識をもった人間にとってその意識の消失は「死」に等しい。そして、先に述べたように、主体のそうした意識が個別具体的な状況において立ち現れる身体と不可分であるとき、その意識の消失は個別具体的な状況にある身体消失でもある。

一方、『ハーモニー』では、個別具体的な身体とともに立ち現れる意識の働き、作品の中の言葉で言えば、「自由意志」によって、Rodenが自己を維持する方略として記述的に示した“切断”と

いう〈倫理〉が可能となっている。そもそも、“切斷”は意識の有無に関わらず自律的に機能する集合体の関係において見て取ることができるものであるが、『ハーモニー』では、個別具体的状況に埋め込まれ身体とともに立ち現れる「わたし」という意識をもつ存在にとっては「自由意志」が“切斷”の決定的な要件として描かれるのである⁽⁶⁾。

そして、伊藤がプロローグのみを書き残した『屍者の帝国』では、「霊素」や「魂」を語ることが1つのテーマとなっており、「その先の言葉」を「わたし」という意識について書くことで模索しようとしていたことがうかがえる。言い換えれば、伊藤は、「すべて状況への適応として脳が獲得したに過ぎないつぎはぎの一部」であり、「ひとつのまとまった存在」などではないことを認識しつつもなお、「わたし」という意識の立ち現れをその「わたし」が〈書き記す〉ことにより、個別具体的な主体がネットワークへと解消されるのではないような世界のあり方を見つけることができるかもしれないと考えたのではないだろうか。

円城塔は、伊藤の残したプロローグを書き継いで『屍者の帝国』を完成させた。円城は、「わたしは誰だ」(伊藤・円城, 2014: 486)という問いに対して、主人公ワトソンに、「わたし」は「ノートに書き記された文字列と何ら変わることはない存在」(伊藤・円城, 2014: 487)であり、「その中にこのわたしは存在しないが、それは確固としたわたしなるものが元々存在していないからだ」(伊藤・円城, 2014: 487)と語らせている。ここでは、確かに、確固とした「わたし」の存在は否定されている。

しかしながら、その一方で、円城は、クリーチャー(「疑似霊素」をインストールされた「屍者」)であり、ワトソンの記録係であったフライデーに、「わたし」について次のように語らせている。「ぼくは意識を持っているのか。持っている、とぼくは答えるだろう。こうして物語を持つことの可能な意識をぼくはここにたしかに保持し

ている」(伊藤・円城, 2014: 514)と。

たとえば、文字列の〈寄せ集め〉であり確固とした存在ではないとしても、その「わたし」について〈書き記す〉ことが、『ハーモニー』のような結末ではない「その先の言葉」、言い換えれば、個別具体的な主体が柔軟にその存在を維持しているようなネットワーク世界の探究への第一歩となりうるのではないか。少なくとも、伊藤の試みを引き継いだ円城は、そのように考えたのではないだろうか。

Foucaultは晩年に、自由を実践し、一定の状態へと自己を変容させる技法としての「自己の技法」について論じている(Foucault, 1997)。Foucaultによれば、「自己の技法」とは、そのおかげで個人が「自己の身体および魂、思考、行為、存在状態に対する一定数の操作を実現することができる、すなわち、幸福、純潔、知恵、完全性ないし不死性のある一定の状態に到達するために自己を変容することができる」(Foucault, 1997: 225)⁽⁷⁾ような技法である。一方で、Foucaultの考えるところでは、「主権をもった創設的な主体、偏在する主体という普遍的形式は存在しない」(Foucault, 2001: 1552)⁽⁸⁾。Foucaultは、自己を言説を通じて産出されるものと認識することを前提としつつ、その変容が可能となるような「自己の技法」を示そうとしたのである。

Foucaultによれば、ギリシアの伝統的な政治生活において第一の地位を占めていたのは、「口頭の文化」であったが、プラトンの著作では、「対話は文学的な疑似対話」に席を譲る(Foucault, 1997: 232)⁽⁹⁾。また、Foucaultは、ヘレニズム時代には、「自己とは、それについて書き記されねばならない何かであり、書記活動の主題ないし客体(主体)」(Foucault, 1997: 232)⁽¹⁰⁾だったのであり、「書き記す行為によって自己の経験は強化され深められた」(Foucault, 1997: 232-233)⁽¹¹⁾と述べる。ヘレニズム時代、「自己の技法」は、〈書き記す〉ことを通じて行使されるものだった

たのである。

こうしたFoucaultの「自己の技法」は、ポストヒューマニズムの論者によっても注目されるようになってきている。自らを哲学的ポストヒューマニストと位置づけるFrancesca Ferrandoがポストヒューマニズムの重要な資源として取り上げるのが「自己の技法」である (Ferrando, 2019: 44, 82-84)。Ferrandoによれば、Foucaultの「自己の技法」とは、「自己を変容させるために個人によって用いられる」技法である (Ferrando, 2019: 44, 83)。しかし、それは、「確固としたわたし」を確認するための技法ではない。むしろ、Ferrandoが「自己の技法」を重要と考えるのは、自己と他者の二元論が関係論的な存在論を通じて見直されるがゆえである (Ferrando, 2019: 44)。また、Ferrandoは、「自己の技法」は、ポストヒューマン・エシックスに向けた議論を可能にするとも言う (Ferrando, 2019: 44)。さらに、Ferrandoは、Foucaultが挙げたような「自己の技法」以外にオーラル・ヒストリー、カーニバル的なものや冒瀆的な笑い、音楽・ダンスなども、「自己の技法」たりうるとしている (Ferrando, 2019: 83-84)。

〈寄せ集め〉であり確固とした存在ではない自己という認識を前提としつつ、ある状態へと自己を変容させるような「自己の技法」。Ferrandoの議論を参考にすれば、そうした「自己の技法」から、個々の構成員が柔軟に変容しつつ自己を維持するようなネットワーク社会の探究をはじめること、それこそが伊藤が我々に残した課題と捉え直すことができるのではないだろうか。

もちろん、Ferrandoの議論にしたがえば、「自己の技法」は、伊藤や円城が示唆したような〈書き記す〉ことに限定できなくなるであろう。すなわち、どのような実践が、我々のネットワーク社会における「自己の技法」となりうるのかは未決定であり、個別具体的な状況において常に問われ続けなければならないであろう。

また、伊藤は、「クオリア」こそが「人間の神秘

化」に貢献していることを批判的に論じている (伊藤, 2014: 385)。つまり、伊藤は、〈わたし〉という意識が超越的な何かであり、そこに、何か特別な意味を見ることには批判的である。伊藤にとって、意識は、あくまで状況への適応の結果であり偶然の産物にすぎない。『ハーモニー』においては、元々戦場で誘拐された少女であったミアハにおいてそうであったように、凄惨な現実の中から意識が生起する可能性が示されている (pp.338-339)。これは、意識に基づく「人間の神秘化」を回避しようとする試みと見ることができるであろう。伊藤が、〈わたし〉という意識へのこだわりが、「人間の神秘化」につながることを回避しようとしていることも忘れてはならないであろう。

8 結び

本稿では、ネットワーク化された高度医療社会がどのような身体や自己のあり方をうみだすことになるのかという観点から、『ハーモニー』の分析を試みた。

『ハーモニー』が描くのは、人々が、健康を維持する医療システムとつながれ、そのシステムに服従することによって、「公共的身体」を形成していく社会であった。その社会においては、〈プライベートな身体〉であるためには、「リソース意識」に満ちた関係性の“切断”が求められた。

『ハーモニー』では、人間が「完璧」になったとされる世界のビジョンも示される。それは、もはや“切断”の意志をもつ「わたし」は存在しておらず、〈プライベートな身体〉が立ち現れることがない世界であった。“切断”が完全に絶たれたその世界は、新たな関係性がつくられることなく、「固定した時間」と「変化のない空間」が完成した世界である。

『ハーモニー』は、逆説的に、身体をもち状況に埋め込まれている中で立ち現れる「わたし」という意識を浮き彫りにしている。その「わたし」

は、状況への適応の結果の断片の集まりにしかすぎず確固とした存在ではない。しかし、「わたし」という意識をもつ存在においては、自己を維持するための方略としての“切断”の〈倫理〉がその意識の働きによって姿を現してくる。

Foucaultは、言説によって産出されるにすぎない存在であることを前提としつつ、自由を実践し一定の状態へと自己を変容させる技法としての「自己の技法」について論じたが、近年では、ポストヒューマニズムの論者もその「自己の技法」に目を向けるようになってきている。

そうした論者を参考にすれば、個々の構成員が柔軟に変容しつつ自己を維持するようなネットワーク社会の探究を、「自己の技法」からはじめること、それが、伊藤が我々に残した課題と考えることができるのではないだろうか。

注

- (1) 檜垣立哉によれば、Foucaultの「生権力」という概念は、「権力そのものがネットワーク的に自己増殖する産出のメカニズム」を表す概念であり、「抑圧を果たす超越論的な位相(国家・法・言語)による『支配』を問題にするのではなく、「超越論性なき場面」による「『管理』」を重要視する概念である(檜垣, 2011: 2-3)。また、「生」権力であるのは、1つには、それが、「死への脅し」ではなく、「生きさせることを目的とする権力」であることによる(檜垣, 2011: 3)。もう1つは、「言語とその機能を軸とした、分類や命令, すなわち、「言説」よりもむしろ、「身体や生命の実在が焦点化され」, 「身体の従順化, 生殖のコントロール, 自己の生への配慮」が強調されることによっている(檜垣, 2011: 3)。
- (2) 日本語訳は渡辺守章の邦訳にしたがった。邦訳では, p.175。
- (3) Rodenは, その思弁的ポストヒューマニズ

ムにおいて, もはや人間とは言えないような, 広い意味での現在の人間の“子孫”を想定することができると考えており, その思弁的なポストヒューマニズムは, 人間とは非常に異なる世界を経験し理解するであろう, 科学技術的にうみだされたポストヒューマンが現れうると想定している(Roden, 2015: 21-22)。そして, そのようなポストヒューマンと人間の断絶を“disconnection”と位置づけている。

しかしその一方で, Rodenは, “disconnection”とは, 極めて高いレベルの機能的自律性をもちつつも非常に異なる力をもつ集合体(semblages)の間の関係であると論じる(Roden, 2015: 147)。つまり, “disconnection”を, 機能的な自律性をもつ主体(agency)の間の関係を表す概念として展開しているのである。

さらに, Rodenは, そうした主体間の関係概念としての“disconnection”に依拠して, 「倫理」(ethics of becoming posthuman)について論じる。Rodenは, Braidotti (2013)のように我々がすでにポストヒューマンと主張するのは大げさであるが, 生の特徴が, 終わりのない技術的な変化に依存するようになっていくという点で, 「ポストヒューマン状況」にあると主張するのは誇張ではないとする(Roden, 2015: 186)。そして, “disconnection”はそうしたポストヒューマン状況にある人間の主体の維持にとっても重要な概念と論じるのである(Roden, 2015: 189-193)。

- (4) 日本語訳は松浦俊輔の邦訳にしたがった。邦訳では, p.11。
- (5) 邦訳では, p.178。
- (6) 確かに, 超越的理性と結びついておらず行為の唯一の原因や起源ではないと仮定したとしても, 「自由意志」が, 行為へとつながるプロセスにおいて決定的な役割を果た

すことを想定することは十分に可能である。その意識の働きは、前後へと無限に広がる因果的連続における中間的な因果過程にしかすぎないかもしれない。しかしながら、そのように因果的に込みこまれた状態にあるということは、ある行為の生起の一部であることを掘り崩すものではないであろう。理論的には、人間の主体が身体の内側、あるいは、身体を超えた複雑なシステムに依存する偶発的なものであるという主張は、十分に「自由意志」の場所を用意しうると考えられる。

- (7) 日本語訳は大西雅一郎の邦訳にしたがった。邦訳では、p.318。
- (8) 日本語訳は増田一夫の邦訳にしたがった。邦訳では、p.251。
- (9) 邦訳では、p.329。
- (10) 邦訳では、p.329。
- (11) 邦訳では、p.330。

引用・参考文献

- Brians, Ella (2011) "The 'Virtual' Body and the Strange Persistence of the Flesh: Deleuze, Cyberspace and the Posthuman." In Laura Guillaume and Joe Hughes (eds.), *Deleuze and the Body*, pp.117-143. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Braidotti, Rosi (2013) *The Posthuman*. Cambridge, UK: Polity=(2019) 門林岳史監訳／大貫菜穂・篠木涼・唄邦弘・福田安佐子・増田展大・松谷容作共訳『ポストヒューマン—新しい人文学に向けて—』フィルムアート社。
- Deleuze, Gilles, and Félix Guattari (1991) *Qu'est-ce que la philosophie?* Paris: Éditions de Minuit=(1997) 財津理訳『哲学とは何か』河出書房新社。
- Dovey, Jon, and Helen W. Kennedy (2006) *Game Cultures: Computer Games as New Media*. Maidenhead: Open University Press.
- 円堂都司昭 (2019) 『ディストピア・フィクション論—悪夢の現実と対峙する想像力—』作品社。
- Ferrando, Francesca (2019) *Philosophical Posthumanism*. London: Bloomsbury Academic.
- Foucault, Michel (1994) *Histoire de la sexualité, tome 1 : La volonté de savoir*. Paris: Gallimard=(1986) 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社。
- (1997) "Technologies of the Self (1988)." In Paul Rabinow (ed), translated by Robert Hurley and Others, *Ethics: Subjectivity and Truth, Essential Works of Foucault 1954-1984*, Vol. 1, pp.223-251. New York: The New Press=(2011) 大西雅一郎訳「自己の技法」蓮實重彦・渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成 X』筑摩書房, pp.316-353.
- (2001) "Une esthétique de l'existence (1984)." In *Dits et écrits, II: 1954-1988, 1549-1565*, pp.1549-1565. Paris: Gallimard=(2011) 増田一夫訳「生存の美学」蓮實重彦・渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成 X』筑摩書房, pp.247-254.
- 藤田直哉 (2015) 「キーワード/SF」『蘇る伊藤計劃』宝島社, pp.68-71.
- Hayles, Katherin (1999) *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*. Chicago: University of Chicago Press.
- Herbrechter, Stefan (2013) *Posthumanism: A Critical Analysis*. London: Bloomsbury Academic.
- 檜垣立哉 (2011) 「生権力論の現在／生権力論の未来」檜垣立哉編著『生権力論の現在—フーコーから現代を読む—』勁草書房, pp.1-13.
- 伊藤計劃 (2014) 『虐殺器官 (2007)』〔新版〕, 早川書房〈ハヤカワ文庫〉。

- (2014) 『ハーモニー (2008)』〔新版〕, 早川書房〈ハヤカワ文庫〉.
- (2015) 『伊藤計劃記録 I』早川書房〈ハヤカワ文庫〉.
- 伊藤計劃・円城塔 (2014) 『屍者の帝国 (2012)』河出書房新社〈河出文庫〉.
- 小財満 (2015) 「Introduction『ハーモニー』」『蘇る伊藤計劃』宝島社, pp.32-35.
- 根村直美 (2016) 「『イノセンス』に見るポスト・ヒューマニズムと〈身体〉の構築主義」『社会情報学』(社会情報学会), 第5巻1号, pp.73-88.
- 野波健祐 「感情がもたらす民主主義と分断」『朝日新聞』, 2022年1月1日朝刊, 37面.
- O’Connell, Mark (2018), *To Be a Machine: Adventures Among Cyborgs, Utopians, Hackers, and the Futurists Solving the Modest Problem of Death*. London: Granta Books. First published in 2017=(2018) 松浦俊輔訳 『トランスヒューマニズム—人間強化の欲望から不死の夢まで—』作品社.
- 岡和田晃 (2013) 『「世界内戦」とわずかな希望—伊藤計劃・SF・現代文学—』アトリエサード.
- Richardson, Ingrid, and Carly Harper (2002) “Corporeal Virtuality: The Impossibility of Fleshless Ontology.” *Body, Space, and Technology*, No.2 Vol.2, <http://doi.org/10.16995/bst.243>, 最終アクセス日: 2023年7月8日.
- Roden, David (2015) *Posthuman Life: Philosophy at the Edge of the Human*. New York: Routledge.
- 立花隆×押井守 (2006) 『NHK「プレミアム10」内対談』, 〈<http://sci.digitalmuseum.jp/project/gis/premium10/>〉, 最終アクセス日: 2021年5月3日.